

ほたてがい



地まきされるホタテ貝の幼貝
(オホーツク海)

表紙 水揚げされたホタテガイ



社団法人 日本水産資源保護協会

〒104 東京都中央区豊海町4番18号

東京水産ビル6階

TEL (03) 3534-0681 3533-5401

FAX (03) 3532-0195 3534-0684



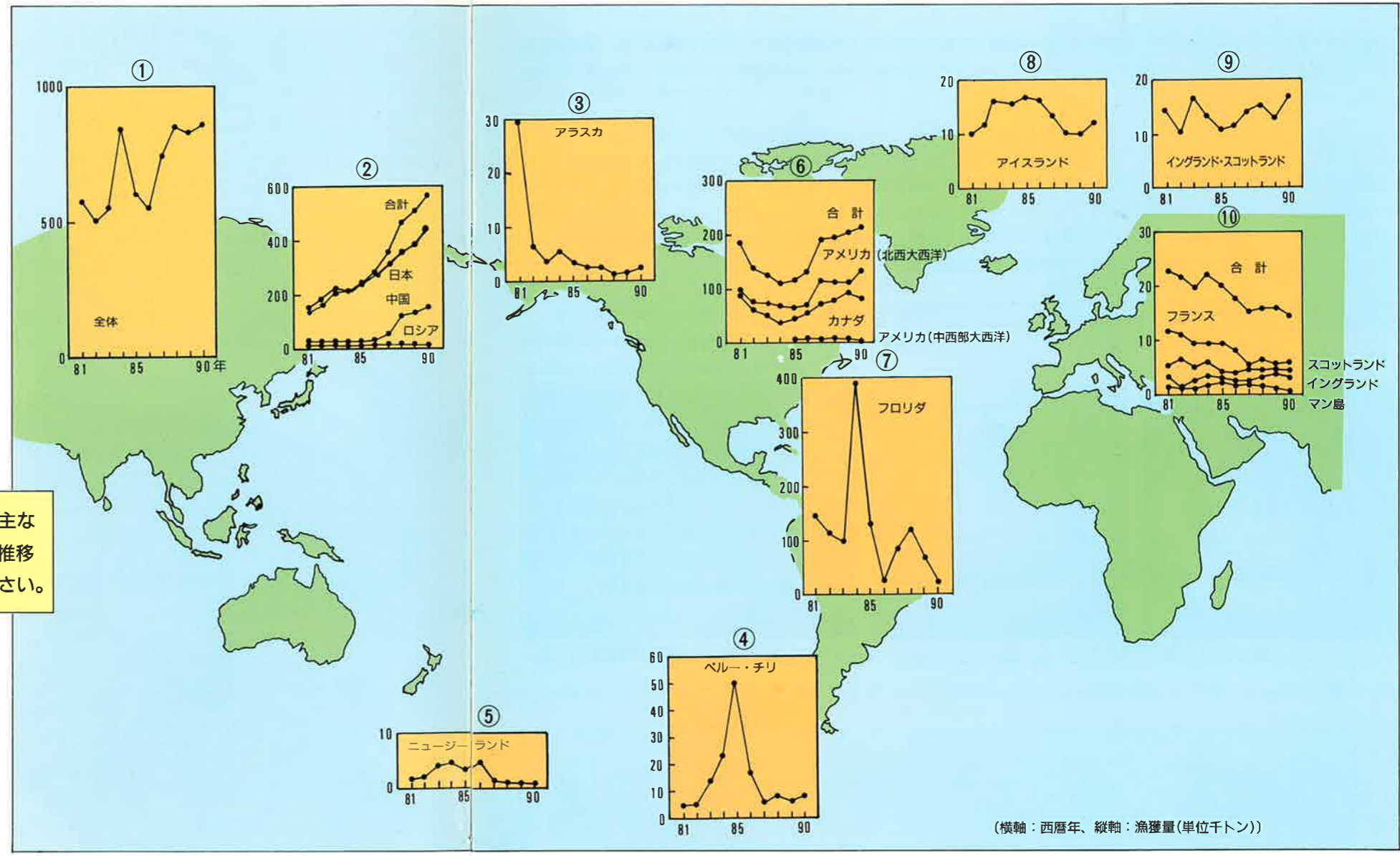
世界のホタテガイ類(Scallop)の分布と生産

我が国のホタテガイは徳川幕府中期以降、貝柱が対中国貿易上重要な海産物となるなど、古くから利用されています。約30年前から北海道や青森県等で増養殖技術が飛躍的に進歩し、カキとともに親しまれている貝類です。近縁の種類は、欧米でも広く分布し利用されています。



FAO (国連食糧農業機関) 統計によって世界の主な種類の最近10年間における漁獲量(殻付き重量)の推移をみます。種類名は下の説明の記号と対応させて下さい。

ホタテガイ類は動物分類学上、二枚貝綱 (Bivalvia)、糸鰓目 (Filibranchia)、イタヤガイ科 (Pectinidae) に属します。この科の貝は一般に右殻がふくれ、殻頂に左右不对称の耳型の部分があり、貝殻表面に放射肋があります。世界に300種ほどが知られますが、大型でかつ生産量の多いものは、主に南北両半球の高緯度冷水域に分布します。



「主な種類と分布域」

- ①全世界のScallop類漁獲量
- ②ホタテガイ Japanese scallop, *Patinopecten yessoensis* (Jay) (分布：日本近海及び近隣)
- ③アラスカホタテガイ Giant Pacific (Weathervane) scallop, *Patinopecten caurinus* (Gould) (分布：アラスカ～カリフォルニア)
- ④ムラサキイタヤガイ Peruvian calico scallop, *Argopecten purpuratus* (Lamarck) (分布：チリ～ペルー)

- ⑤ニューゼーランドイタヤガイ New Zealand scallop, *Pecten novaezelandiae* Reeve (分布：ニューゼーランド)
- ⑥マゼランツキヒガイ Sea scallop, *Placopecten magellanicus* Gmelin (分布：ラブラドル～ノースカロライナ)
- ⑦フロリダイタヤガイ Calico scallop, *Argopecten gibbus* (Linné) (分布：フロリダ近海)
- ⑧オーロラニシキガイ Iceland scallop, *Chlamys islandica* (Müller) (分布：アイスランド近海)

- ⑨セイヨウイタヤガイ Queen scallop, *Chlamys opercularis* (Linné) (分布：北ヨーロッパ)

- ⑩ヨーロッパホタテガイ Common scallop, *Pecten maximus* (Linné) (分布：北ヨーロッパ)

我が国ではホタテガイのほかに、イタヤガイ(分布：北海道～九州)、アカザラガイ(アズマニシキガイ、分布：三陸～九州)、ヒオウギガイ(分布：房総半島～九州)などがローカルに漁獲され、養殖も行われています。また、ホタテガイについて、FAO統計では上のように一括されていますが、中国産のものはアメリカ東岸から種苗を搬入して養殖されたBay Scallop(アメリカイタヤガイ *Argopecten irradians*)でホタテガイより小型の別種です。

ホタテガイの生態

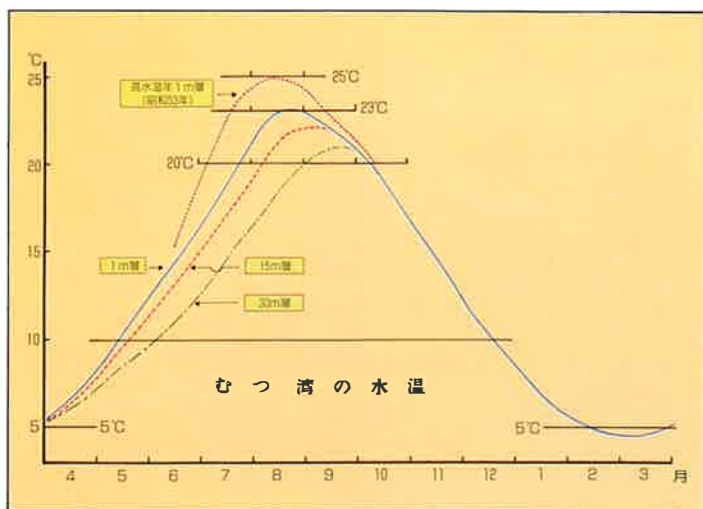
分布

我が国のホタテガイは太平洋側では東京湾、日本海側では能登半島以北に分布します。しかし産業的には、青森県のむつ湾、北海道の噴火湾、サロマ湖、オホーツク海沿岸が中心で、近年養殖技術の進歩発展により岩手県、宮城県にも産地が広がっています。

生息場所の環境条件

天然貝の生息場所は普通水深10～30mの海域（むつ湾で40～50mで発生した事例もあります）で、アサリ、ハマグリ、コタマガイ等に比べ粒の大きい砂泥域や砂礫場を好んで分散して生活します。

生息環境のうち、水温について、むつ湾の例を図に示しましたが、ここでは、冬（2～3月）には4℃位まで下がり、夏季（7～9月）には25℃（表層）～30℃（30m層）まで昇温します。



産卵から成貝まで

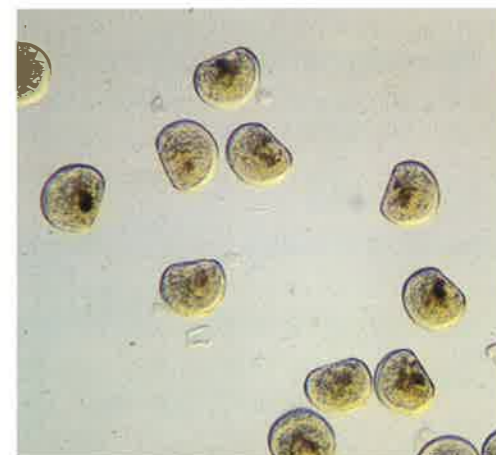
ホタテガイは雌雄異体の貝類で、春（むつ湾で3～4月、サロマ湖では4～5月）に産卵期を迎えます。むつ湾では、冬に水温が下がるにつれて生殖腺が発達し、次第に水温が上がると（6～8℃）放卵、放精し水中で受精が行われます。約40日間、浮遊幼生期の生活を送りますが、その後、海草類やロープ・漁網・養殖用採苗器等に付着して40～60日を過ごします（付着期）。付着時の貝の大きさは約300ミクロンで、電子顕微鏡でみた姿はUFOを思わせます。

夏に、殻長8～10mmになると、付着力が弱まり自然に落下するので、底層の貧酸素など悪い

条件にさらされることになり、稚貝は死滅の危機にさらされます。したがって、付着期に稚貝を種苗として採集し（採苗）、これを一定の大きさまで人為管理下に育てること（中間育成）が、増養殖技術のポイントです。

ホタテガイの主な餌料は小型のプランクトンやデトリタス（プランクトンの死骸やその分解した有機物）です。またヒトデ、ムラサキガイ、フジツボ類、ユウレイボヤ、群体ボヤ等が殻に付着して生理的な障害を与えたりする場合がありますが、順調に成長を続けられれば、およそ2年で成貝になります。

一般的な成長傾向を殻長の図で示しました。8～9年で最大殻長20cm位になります。なお、殻には年輪が形成され、年々の成長割合を知ることができます。



浮遊稚貝



電子顕微鏡による付着稚貝



(雌)



(雄)



ホタテガイ（帆立貝、海扇、秋田貝）の名前の由来：

和漢三才図絵（1712年）に「俗に帆立貝といい……北海・西海に多し、大なるもの径1・2尺、口を開いて一の殻舟のごとく、一の殻帆のごとし、風に乗って走る。故に帆立貝と名づく」とあります。実際ホタテガイがこのように行動する

ことはなく、両殻を開閉させ海水を噴射させて移動します。また西海に多いというのは、イタヤガイとの混同があると思われる。